

Evelyn Waugh の空想社会 (2)

宮 井 敏

(承前)

Waugh の *Love among the Ruins* という標題が Robert Browning の全く同名の詩 (1855) からとられたものであることはあきらかである。旧都の廢墟の小塔にたたずむ若い相思の二人の愛は全盛期の都の壯麗さをしのぐものがあるという恋愛至上をうたったこの詩は *Men and Women* (1855, 初版) の巻頭を飾る彼の代表作の一つに数えられるものであるが、かつてはこの国の都として、その王は群臣をあつめてまつりごとを見、その城壁は百の城門をめぐらし、そびえ立つドームは焰のごとく四隣を圧して威容をほこり、chariot はその鉄輪に火花をちらしてはせめぐり、廷臣、貴婦人を従えて王が觀戰したであろうその小塔に、今相思の二人は火と燃えて愛を語るという趣向になっており、最後に “Love is best” と恋愛至高をたたえてむすんでいる。

作者 Browning は1853年の冬、Rome の Campagna 平原に立って、そぞろ今昔の感に打たれてこの詩の着想を得たといわれているが、旧都の描写そのものは、“全市をめぐらす百の城門” (The hundred-gated circuit of a wall) という語句を見てもわかるように、(ローマの城壁は最盛期12の城門を有するにすぎなかった) 全く詩人の空想の所産であることはあきらかであろう。

さて Waugh はこの珍らしい未来小説の舞台を近似の未来のロンドンにおき、若い二人の愛をその未来社会の中に展開させているのであるが、作者の全く空想の産物であるこの未来都市を何故に ruins 廢墟と見るの

か、又そこにひらく若い二人の関係は果して愛と呼ぶに価するものであるのか、そこに作者の意地悪い irony がひそんでいる、とまず見る事が出来よう。

ところで、1953年のこの*Love among the Ruins* の発表後20年近くたってアメリカ南部に *Love in the Ruins* (1971) という小説があらわれた。Waugh と同じ Catholic writer である Percy Walker の、これも同じ近似の未来のアメリカ (1983年頃) に舞台をおくこの作品は、その名も Thomas More と呼ぶ doctor が、誰も修理工になりたがらないために街は廃棄物で瓦礫の山となり、強いつる草がびっしりはびこって建物も今や崩壊寸前であるような廃墟同然の街で、自分一人が危機的状況を予知しているものもつ絶望的なあせりと苛立ちからさまざまに奔走するのであるがすべては徒労におわり人類滅亡の時は刻一刻迫って来るという story である。この終末論的な、神を見失った社会の絶望と恐怖のさまを語る story と、既成の道徳感からすれば罪悪でしかない free sex 同然の、複数相手の Tom の恋とは、つきつめた形で現代社会のもつ根源的な anxiety を見事に描き出してみせることによって、Waugh の全くあづかり知らなかった形の廃墟の恋を語っており、まさにその事自体が期せずして Waugh の作品に対する痛烈な irony となっているのである。

かなり近い未来のイギリスではやや紀律のゆるんだ全体主義政権が支配している。個人の責任を一切問う事のないこの国では新刑罰論の結論に従って犯罪者はすべて矯正施設に収容されることになっている。放火のためにこと Mountjoy に入れられた Miles Plastic はこの国ではエリートを意味する孤児の出身であり、将来を約束されて出所後 Euthanasia Centre に赴任する。あやまってダンス課から安楽死希望者として送られて来た美貌のダンサー Clara とそこで知り合い恋に陥る。この Clara はダンサーとしての不妊手術の副作用から細い絹糸のような髭をはやしているが、その不妊手術そのものが失敗だったために Miles との交渉で妊娠してしま

い、中絶とヒゲ面の整形のために姿をかくして入院する。ようやく彼女を探しあてた Miles は彼女ののっぺらぼうの顔を見て黙って立去る。無意識のうちに元の古菓の Mountjoy に来ていた彼は例の癖から放火して施設を全焼させてしまう。彼が真犯人だとも知らない文化・休養大臣は国家の子、矯正施設の申し子 Miles を新刑罰論の誇るべき成果として全国に巡回派遣するべく準備させる。彼のポケットには例のライターが次の獲物を求めてカチカチ鳴っていた。

さてこの空想社会は大きく云って二つのものを諷刺しようとしている。一つは福祉国家における個人の責任の蒸発であり、今一つは全体主義社会におけるおそれるべき非人間化の進行である。まず、この国では New Lawのもと、何人も自己の行為の責任を問われる事はなく、又 New Penology の考え方によってすべての犯罪行為は antisocial phenomenon として一括され、犯罪者は社会的に不適合な人物だとされて補導主任にひきわたされる (Samuel Butler の *Erewhon* の中の straightener をおもわせる)。さる貴族の居城であった Mountjoy でも庭園に面した最上の部屋は murderers に、又二階正面は sexual offenders に割当てられ、放火した位では Miles には片隅の貧弱な部屋しかあてがわれない有様である。この結構な犯罪者天国の唯一の欠点は、いつ “rehabilitated” と判定されてほうり出されるかわからない点にある。従って長ズボンもはかぬ内からのコン泥暮しのベテラン達にはそれが大きな不満の原因となっている。“昔はヤマを踏んだら相場ってものがあって、6ヶ月か3年か、くらい込む見当はついた。それが今じゃあ Preventative Custody だの Corrective Treatment だの刑務所委員だのとさっぱり見当もつかねえ” という訳である。泥棒でさえ己の刑期に責任が持てないと嘆いているのであるが、Miles も又、ある朝突然治癒したと判定されて、衛星都市の福祉省安楽死課へ配属される。毎朝十時福祉社会の刺激のない生活に倦きてしまった市民達が自ら死をとげる気力もなく無責任にも国家機関の手によって苦痛なくこの世に別

れを告げようとして殺到して来る。この国ではこの制度は1945年 当時に制定された *National Service* には含まれていなかったのであるが *Tory* 党が高令者や病人の票をあつめようとして健保適用を決めたのちに、保守労働連立政権になってから一般にも適用が拡大され、今では福祉制度の中での最重点政策として行なわれているのである。安楽死課長 *Dr. Beamish* は云う。

「わしの両親は自分で用意した物干のロープを使って裏庭でぶら下った。近頃の連中と来ちゃ自分で指一本動かそうとせん。プラスチック、どこか制度が間違うとるんじゃよ。There are still rivers to drown in, trains —every now and then— to put your head under; gasfires in some of the huts. それを奴等と来ちゃあ何もかも国に頼ろうとする」。そこへたまたまとび込んで来た *Clara* も又無責任体制の犠牲者である。ダンサーとしての不妊手術の副作用から髭を生やしてしまい、希望もしないのに安楽死課へ送られ、*Miles* とは出会ったものの、再び何かの間違いから彼の子供をはらみ、中絶手術をうけ、ヒゲの整形手術をうけると又ぞろ失敗して合成ゴムの皮ふが顔に貼付いただけののっぺらぼうの顔になってしまい、しかも本人はそれに気づいていないと云う有様である。

こんな状態だからこの全体主義社会全体の機構ははなはだしくゆるんでいる。停電は常の事だし、配給食糧は不足勝ちで、年中ストに悩まされ、その上本部の指令なしに *Wild cat strike* をやるために放映中のテレビが突然止まったり、新都市の計画は設計担当者のデスクの上にとまったままだったり、結局役人達はタバコの吸殻だらけの薄暗い廊下を黙々と影のように力なく家路につくのである。

一方またこの空想社会では全体主義政権のもと人々は到底人間としての取扱いをされず、まさに古代帝国の奴隸のごとく、蟻塚の蟻のごとく、無名の灰色の群衆としてしか存在を許されていない。官僚体制の支配するこの国ではあしき *bureaucracy* のうみ出す *redtapism* が横行して、an

institution to train instructors to train instructors to train instructors in Personal Recreation というような機関があったり、すべての政府部局の無数の filing cabinet のなかに人々の経歴がすべて file されていたりする。またあまりに離婚がはげしいためにもともと誰と誰とがはじめの組合せだったのかわからなくなってしまい、従って両親のあるなしにかかわらず孤児がどんどんふえる結果、国家が集団育児を組織するようになりその人間的情緒の全き欠如のゆえに彼等孤児達は別格のコーストとして一個のエリート集団を形造っているのである。そこでは一切の感情抜きで、図表、実例、応用とすべての性のテクニックが徹底して教え込まれ、定期的な精神分析をうけて巣立って行くのであった。Miles が出所しようとした日の朝、Deputy Chief Guide は云う。“In less than a minute you become a Citizen. This little pile of paper is you.”

大体個人が全体主義社会の中で没个性的にしか処理されないという恐怖はとりわけ空想社会を描き出す作家にとっては古くして新しいテーマであるが、さらにすすんで、巨大社会において管理体制が進行するにつれて個人が個有名詞としての姓名を有する個人または生きた実体を有する人間としてではなく書類の上で数量的にしか扱われないだろうという Waugh の指摘はたしかに一つの問題提起としてうけとめる事が出事よう。補導主任代理の手元で書類の上をおどる flip thump, flip thump というゴム印を押す音は、すべての国家の機構にひそむ非人格的管理体制が文書に象徴されていると見た Michael Bakunin をしてでおそらくは破壊への衝動にかり立てるものであったであろう。

ここで思い出されるのは W. H. Auden である。彼は 1939年、*Listener* に発表した“The Unknown Citizen”という詩の中で Bureau of Statistics のしらべではまさに模範的であるとされた無名の市民のことをうたっている。

“To TS/07/M/378 This Marble Monument is erected by the State”

という副題をつけた（因みにこの符号は無名戦士の墓の整理番号の parody であると云われているが、Ira Levin の完全なる国民総背番号制の管理国家を描いた *This Perfect Day* (1970) の主人公の市民番号 Li RM 35 M 4419 やその恋人の Anna SG 38 P 2823 などをおぼせるものがある）この詩には、まさに Miles Plasticのごとく従順で、仲間の気うけもよく、社会心理学的にも優生学的にも何ひとつ欠点のない市民 “He” が描かれているのであるが、最後のところで Auden も又 “Was he free? was he happy?” と鋭どく問いかけているのである。

この社会はまた、同じ全体主義国家であっても George Orwell の *Nineteen Eightyfour* 中の *Airstrip One* とは違って、同時に福祉社会でもある訳だが、そうした福祉制度のうみ出すやり切れない倦怠と責任不在が euthanasia を social welfare の最終形態と見做す風潮を生んでいる。元来、この “euthanasia” という言葉は Francis Bacon が *Advancement of Learning* の *Second Book* の中で Augustus Caesar や Antonius Pius などの古代ローマの例を引きつつはじめて造語した言葉であるが、実際には、おおよそこれに先立つこと一世紀、Thomas More が *Utopia* の第七章でかなり詳しくこの安楽死についてのユートピア国での実施状況をのべている。（もっとも Edward Surtz と J. H. Hexter 編の *The Complete Works of Thomas More* (Volume 4) などでは “Euthanasia and Suicide” という標題がかかげられているが、これは両名の編集上の小見出しであって、原文には “Mor spontanea” (Voluntary death) としか書かれていないので、この言葉そのものは Bacon より始まると見てよい)。それはともかく、Bacon, More とともに「不治の病のもたらす苦痛からの解放」としてのみ安楽死を想定しているわけであって；「生きていることの倦怠からの解放」として euthanasia を考えたのはまさに Waugh をもって始めとするところであり、同じ totalitarian な機械化社会を描いた E. M. Forster の *The Machine Stops* (1928) の地下都市においても^⑧、又同じ福祉制度

(“instrumentality” とよばれる) をもつ未来社会を描いた Cordwainer Smith の *Alpha Ralpa Boulevard* (1961) などにおいてもついに登場しなかった問題提起であるといえよう。

この安楽死問題はイギリスにおいては1936年議会に提案され、時の Canterbury 大僧正の強い反対にあって流産、1950年には一たん提案して、のち取下げ、そして1969年、上院において賛成40票、反対61票で最終的に葬り去られたという経過をたどっている。敬けんなる Catholic writer である Waugh にとっては自殺はおろか、他人の手をわずらわす安楽死などは正に「手のこんだ殺人」でしかなかったであろうが、個人主義原則にたつ old liberalist Waugh からみて、福祉国家のサービス過剰、怠惰な大衆に対する過保護的制度は、ゆきつくはてはついには安楽死サービスにまで到るであろうとみたわけであり、その点ではこの caricaturization は black humour としても成功していると見てよい。問題は Waugh の意図した諷刺が諷刺としてではなく、単なる願望ととられかねないところにつまり、そのうちサービス機関としての Euthanasia Centre がどこかに出来かねないと感じられるところに今日の文明の病根の深さがあるといえよう。

かつて Waugh は *Loved One* (1948) において、アメリカ西部における葬儀産業の隆盛をといあげ、人間の死をすら商品化してしまう資本主義社会の貪婪なまでの企業活動を描いてアメリカ文明の本質の一端にせまろうとしたが、20年後、David Ely は *The Tour* (1967) において、アメリカの果物会社の都合で出来たような Banana Country と俗称される南米の一小国で、観光資源にこと欠くあまり、アメリカ人観光団に対する客寄せの目玉商品として、共産化したこの国の山間部族のゲリラ活動を掃蕩する戦闘を安全地帯から見物させるという特別観光コースを考え出した旅行社の話をもとに描がき出して見せた。ベトナムにおける戦闘の状況を人工衛星で実況中継するという企画を立てた日本の民放テレビの事を考え

合せると、あながち荒唐無稽とも云えない気がするのであるが、さらに最近では資本主義経済下の商品やサービスを「無限」につくり出す技術能力を前提として、消費者の「無限」の欲望に応えるべく「無限」の想像力を駆使して販売促進のための「無限」の方法、つまり market creation analysis を開発しようという Infinite Capitalism (Icology, IC + ology) という考え方があり、それによれば、自殺をねがう人々に対して実際の死を瀬戸際まで経験させる擬死サービスというエージェントまでが考えられているという。現実の社会の激変は Waugh の好んで行なう、部分的特徴の意図的誇張という caricature の技法が realism と見誤まれかねないところまで来てしまったわけである。

ところで空間か時間かいづれかの次元をうつして空想社会をつくり出す場合、現在という時間はそのままにして、この地上で空間のみを移動させようとする、それは主として三つの地域に限定される事はさきののべた。読者の穿さく好きな好奇心を無視しないでしかも自由な空想の展開を妨げないためである。同じ原則に従って、空間を固定して時間のみを（主として未来へ）移す場合は、当然の事ながら熟知の空間が、つまりイギリス文学の場合は London がえらばれる事が多いわけである。前回にのべた時計の針を逆行させる形の Mark Twain の *Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889) もそうであるが、未来小説の場合でも Richard Jefferies (1848—87) の *After London* (1885), William Morris (1834—96) の *News from Nowhere* (1891), G. K. Chesterton (1874—1936) の *The Napoleon of Notting Hill* (1904), 現代に入って George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* (1949), Aldous Huxley (1894—1963) の *Brave New World* (1932), Angus Wilson (1913—) の *The Old Man at the zoo* (1961), Brian W. Aldiss (1925—) の *Greybeard* (1965), Anthony Burgess (1917—) の *A Clockwork Orange* (1969) などいづれも遠い或は近い未来の London を舞台としている。そしてはなはだ興味深いのは Morris の

News from Nowhere を唯一の例外として、これらすべての stories の中の London は荒廃して太古の昔へ帰ろうとしているか、或は全体主義政権のもと、暗く沈んで精神的には全くほろび去っているかであるという事である。つまり熟知の社会体制が一定の時間的経過の後に如何なる変化をとげるかという発想を展開するにあたって、その当該社会の地理的条件すなわち空間的次元のみは固定しておくという事は、それによって未来社会がどのような論理的帰結として出現するかをより鮮明かつ直載に提示しようとする意図に基いている。また、科学の無限の進歩に素朴な信頼をよせて明かるいバラ色の未来を謳歌しているアメリカ系統の Science Fiction は別として、人類文明の究極の運命をみつめる未来小説では19世紀以降そのほとんどが暗い絶望をうたいあげており、産業革命以降のイギリスにおける貧富の差の拡大、それによる労使の紛争の激化、社会主義思想の発展、不安定な国際情勢、非人格的な管理機構の強化、そこから生まれる人間の疎外、および信仰の喪失を考えると、その pessimism は必然の結果であろうし、又、一見 optimistic にのびやかな牧歌調の未来を語っている *News from Nowhere* でさえも、あるはげしい catastrophe の結果としての utopia の物語であり、H. G. Wells のあまたの作品も含めて、それらすべてが終末論的な陪音を伴っている事は注目されなければならない事であろう。

さて Waugh はこうした空想社会構築の原則に従って、一つは現代の東ヨーロッパ、或はアフリカを舞台として、又一つは未来のロンドンを舞台として仮空の世界を描がき出してみせたわけである。そもそも utopia の語源が本来ギリシア語の *utopos* (nowhere) である以上、Seth の治めるアフリカの Azania 帝国も、Scott-King 先生の旅した東ヨーロッパの Neutralia も実在せぬからには utopia と云えぬ事ばなかりうし、又元来理想郷であるべき社会像を戦慄すべき恐怖の未来社会として描がき出すがゆえに逆ユートピア dystopia と呼ぶならば、New Britania もまさにそ

の一つと云えよう。だがユートピア思想を社会変革の思想ととらえてその展開を、理想郷の提示、それによる現実批判、それへ到達する科学的手段の検討、と分析してみるならば、Waugh の描く如き空想社会はもとより理想郷ではありえず、さりとて又具体的解決への提案をも含まない以上、そこでは現実批判という側面のみが強く浮かび上がって来る事になる。つまり Manheim の云う「現実変革機能」なるものを欠いた存在超越意識^④が、一つの規範意識に支えられつつ表象下にひそむ事物の本質を暴露するという作用を行なっていると見る事が出来る。Waugh にとってはこうした *utopian fantasies* も又諷刺の一つの技法であったわけである。

この場合、*Neutralia* や *New Britaina* という空想社会の道具立てがきわめて *simple* で子供だましのようなところがある事はかならずしも批難の理由とはならない。なるほど空想社会は、ともかくもそれが一個の社会であるからには、そこに行なわれる法律制度、経済機構、政治組織、さては人情、風俗、習慣といった社会環境がどのようなものであるかは提示してみせる必要がある。ユートピア作家には一定の社会科学の知識が必要だとされる所以である。けれども例えば前述の *News from Nowhere* などでは SF のもつ擬似客観性を捨てて、作者の诗情豊かな牧歌的ロマンのみがのびやかに語られている。歴史的発展の意味をどうとらえるかという *Weltanschauung* が背後にあれば社会の構図の *detail* や整合性は必ずしも問題ではないというわけである。従って、その意味で Waugh の作品の場合問題となるのはその客観的細部の欠如のゆえではなくて、統一した世界観から発せらるべき問題指摘の鋭鈍、当否という事になるのである。

おもうに Waugh が意図した当初の狙いは *Neutralia* とか *New Britaina* といった全体主義国家を描き出す事によって、そこにおける管理の進行と人間の疎外、ひいては責任の蒸発を指摘することにあつたとおもわれる。その事自体はたしかに従来の彼の諷刺小説にみられる *minor* な状況ではなくて、現代文明がかかえる大状況の一つであつた事はたしかであ

る。又、古都の廃墟を背景とした至純の愛と、荒廃した London を舞台とする不毛の愛とが鮮やかな contrast をなしている事も事実である。けれども、美女がひげを生やし、模範市民が放火魔であるという abnormal な状態は、すべてが abnormal な世界にあってはむしろ normal な事であり、人間復権のあかしであるという逆説が力強い説得力を欠いているのは、作者 Waugh の護教神学的な価値観のせいであり、conservative な individualist の Welfare state に対する皮相的な心情的反撥であり、真に悲劇的なものへの不感症のゆえではなかろうか。それが Percy Walker の *Love in the Ruins* をして成功せしめた理由であり、Evelyn Waugh の *Love among the Ruins* をして成功せしめなかった理由であろう。(完)

注

- ① *Tactical Exercise*, "Love among the Ruins," Little Brown & Co., Boston (1954), p.268
- ② "Only the old and the sick remained ungrateful, for it was rumoured that Euthanasia, too, was out of order, and that pain reappeared among men." E.M Forster: "The machine Stops." (*Collected Short Stories*, Penguin Books), p.142
- ③ この原則に従わないものに Alan Sillitoe: *Travels in Nihilon* (W. H. Aallen, London, 1971) がある。
- ④ K. マンハイム, 「イデオロギーとユートピア」, 未来社。